

よきおとずれ

カトリック釧路教会だより

〒085-0018 釧路市黒金町 12 丁目 10

第 11 号 2018 年 4 月 1 日発行



わたしは復活であり、命である

ヘルマン 渡辺 義行 神父

父が帰天して間もなく、弟の家族が静岡から月形のホームにやって来ました。

私の父は、弟の家族のもとで数年を過ごしました。当時 4 歳位だった姪が、父の顔をじっと見て、「おじいちゃんは、しんだけど、いきているんだよ」と言ったのです。この言葉を伝え聞いた時、これはまさにイエスの復活の証言だと私は受け止めました。

ラザロが墓に葬られて悲嘆に沈んでいたマルタにイエスは言われました。「わたしは、復活であり、命である。わたしを信じる者は、たとえ死んでも生きる」(ヨハネ 11・25)

私たちは、洗礼を通してイエスに結ばれ、神のいのちをいただいている者です。聖パウロはこう書いています。「神は、わたしたちの主イエス・キリストによって救いを得るようにお定めになりました。主はわたしたちのために死なれました。それは、わたしたちが、目を覚ましているにしろ眠っているにしろ、ついには主とともに生きようになるためです」(テサロニケ (一) 5・9-10)

熊本のハンセン病院を訪ねたことがあります。数日、そこに滞在させていただきました。

裏庭に墓地があり、その中央に刻まれた文字に私の心は捉えられました。「主が再び来られる時、我らも共に復活せん」この病気に冒された人は、名前も、戸籍も抹消され家族、社会から引き話されて惨めな生活を余儀なくされたのです。そのような中で、確信したのは復活のキリストへの信仰だったのです。

「キリストが復活しなかったとしたら、わたしたちの宣教も無意味なものであり、あなたがたの信仰も無意味なものとなるでしょう」(コリント (一) 15・14)

“私たちは、復活を信じます”先人たちが高らかに歌ったこの信仰宣言を私たちも希望と喜びをもって生きて行きましょう。



よびかけに応える恵み～黙想会に参加して

マリア・パウラ 橋本 優子

洗礼を受けて 50 年あまり。主人がなくな
って子育て・仕事・母の介護と忙しく過
ごしてきました。すべてを終えたとき、
これからどのようにたくさん、いただ
いた恵みを生きていこうかと考えるよう
になりました。そしてイエスさまからの呼
びかけを日々感じて過ごしたいという願
いに気づくようになりました。

そのようなとき娘から声をかけられて昨
年暮れからお正月にかけて黙想会に参加
することになりました。「イエスに出会
った人」というテーマで過ごす 8 日間の黙
想。午前中は毎日 30 分の講話があり、そ
の後は主とともに過ごす時間です。夕方
ミサがあり、夕食を終えてから 45 分間の
聖体顕示で 1 日が終わります。(最初はこ
のように長い時間を黙想できるかと不安
でしたが、神父様と面会をしたり、黙想
に来られた皆さんとともに祈る中で静か
な時を過ごすことができました)。

そして人々がイエス様に会うことによ
り、どのように変わっていったかを聖書
を通して黙想し、わたし自身も洗礼を受
けてから、今までを振り返る時を持ちま
した。指導の神父様から福音書の場面を
想像し、イエスさまの行動・周りの人の
動き・背景の中に自分を入れて黙想す
ることを教わりながら、相手をよく見て状
態を感じ、話しかけ、望みを聞き、心を
合わせ、望む人には慈しみをもって救い

を与えられるイエスさまの姿に出逢いま
した。そして人々は今までのとらわれか
ら解放されていきます。それは立派な信
仰ではなく、わずかな信仰・自己中心
的な望みであってもその望みの中にある小
さな信仰にイエス様は目をとめて願いを
かなえてくださるとのこと。私はこれま
で事柄とか形を探し求めてきましたが何
よりもまず、イエス様と、また他者と関
わり、分かち合うことの大切さを学んだ
ように思います。そして自分では不可能
なことであっても神様は助けてくださ
ると確信するようになりました。8 日間
を終えるころ、何か自分の心が楽になっ
てきているのを感じました。

これからの日々の中で釧路教会の皆様と
ともにイエスさまの道を歩んでいきたく
いと願っています。そしてこの黙想会に娘
とともに参加し、過ごすことが出来た恵
みを神様、そして主人と母に感謝してい
ます。

イエスは教えられる

積極的に 神様と人とかかわること、
分かち合うことを

(関係がなくとも関係を作るほどに)
神をほめたたえ、救いの喜びを告げるた
めに！」

東日本大震災の支援にかかわって

アンナ会

2011年3月11日に起こった悲しい出来事～東北地方を中心とした大地震と津波、そして福島第一原発の事故…。この7年間、アンナ会では札幌教区サポートセンターを通じ、編み物、パッチワーク等で小物を作り、支援に参加してきました。これまでの支援を振り返っての思いを寄せていただきましたのでご紹介します。



300年に一度と言われる大震災に、

日本カトリック司教団はいち早く、これから10年間は支援を続けることを決めました。

私たち釧路教会アンナ会も何かしたいということで話し合い、被災された方々の心と体を少しでも暖めることが出来たらとの思いでモチーフ750枚をみんなで編み、ひざ掛けをつくり送ったのが最初でした。その後はパッチワーク、ミシンで小物、お手玉の豆、送料、古いセーターをほどいてくれたり、布地をたくさん献品してください。本当にたくさんの方々の協力で現在も続いてやっています。

現地が少し落ち着いてきたので今は札幌カリタスに献金としていただいたものを送り続けています。どうぞこれからも忘れずに！（テレジア 貫田エミ子）

あの大震災から7年余り、復興にはまだまだ遠い道のりと聞いています。



それなのに何も支援できない自分を歯がゆく思い、小さなことですが、皆様のご協力のもとミシン掛け等を伝差し伸べていくことも大切だと思います。



差し伸べていくことも大切だと思います。お寄せいただいております。こんなことでも

喜んでもらえるならと思います、いま自分ができていることを喜びと感謝、そして楽しみながら…。

これらを通して、苦しみや悲しみを共有し、人の心に寄り添えるやさしさを学んでいきたいと思っています。

これからもご協力、ご支援よろしくお願ひします。

（マリア・フランシスカ 田附 躬生子）



3.11の東北大震災から、はや7年が経とうとしています。被災されて仮設住宅で暮らしている方たちのために古い毛糸を集めてひざ掛けを編み、送ったのがはじまりです。

第一便は確か25枚だったと思います。それから何度か札幌カリタスを通して帽子、マフラー等を送り喜んでいただきました。

現在は教会のバザーの時などに手作り販売して得たお金を寄付しております。

細く、長くその方たちに寄り添い、手をまた地震による原発事故でいまだに故郷に帰れないでいる人のことも忘れないでいきたいと思います。

現地では放射能漏れによる小児がんが今も多発しています。その子供たちを支援する民間ボランティア団体も立ち上がりました。今後はそういう方面にも少しですが、援助できたらいいなと思っています。(クララ 堀内優子)

世界祈祷日集会に参加して

マリア・ヘルミン 土谷 幸子

3月2日は世界祈祷日でした。世界中で毎年3月第一金曜日は様々な教派・教団が参加し、テーマにそって祈りを共にしキリストにある一致を目指し、共通の課題を担い、キリストにある証を行います。釧路地区ではカトリック釧路教会で開催され、10教会から60名の参加がありました。

2018年のテーマは「すべて神の造られた

ものはとてもよい」で、式文はスリナムの女性たちにより作成されました。祈りの前に先ず、スライドでスリナムの国について地理と人口、環境と生物多様性、政治史や経済などを学びました。祈りの中では神が作られたものを大切にできなかったことを告白し、持続不可能な開発や保全を無視した消費が次世代のための地球の未来を脅かすことを認め、赦しを求めました。そして神の造られたものを大切にするための取り組みを各人カードに書き、献金と共に捧げました。一人ひとりの取り組みは小さなことであっても世界祈祷日に参加した世界中の人々が行動を起こすと大きな力となるでしょう。

神様からの贈り物を大切に保っていく責任を強く感じた祈祷日でした。

編集後記

私事の話になりますが、1995年のイースターでのパンフレットで、イエス様のみ言葉に出逢い、受洗の恵みに与りました。

広報誌が何方かの心へ《み言葉》を運ぶ架け橋となることを祈りつつ編集後記を書いています。ご復活！アレルヤ！ (N.S)

カトリック釧路教会 〒085-0018 釧路市黒金町12丁目10

TEL 0154-22-5823 FAX0154-22-5832

教会だより 編集：広報委員会